

哲学と現実の関係

〈開かれた〉ヘーゲル哲学をめぐるメタ哲学的考察

飯泉佑介(日本学術振興会特別研究員 PD/京都大学)

本発表の課題は、G. W. F. ヘーゲルの体系期の哲学が、いかにして自己完結的でありながら経験や歴史に対していわば〈開かれた体系〉でありうるかを検討するために、哲学と現実の関係という観点からその哲学全体の構造を分析することである。

本発表で焦点を当てる「現実」は、『大論理学』本質論で論じられる「現実性(Wirklichkeit)」ではない。そうした哲学体系内で位置付けられるカテゴリーの一つではなくて、例えば、『法哲学』序説で「現実に対する哲学の姿勢」(GW14, 1, 13)と称されるとき「現実」、つまり、哲学のいわば〈外部〉に位置する「現実」のことである。無論、体系期のヘーゲル哲学が「絶対者の体系」(GW20, 56)と見なされるならば、それにとって端的な〈外部〉がどのような意味で問題になるかは自明ではない。〈外部〉が完全に看過されるのであれば、かつてH. キンマーレが「イェナ体系構想」に対して当てた表現を援用して、「自己閉鎖的体系」と呼ばれるべきだろう。ここには、19世紀後半のヘーゲル学派以来、継承者や解釈者を悩ませてきたヘーゲル哲学特有の困難の一端が現れていると言ってよい。

だが、なぜこのジレンマを、今日あえて俎上に載せなければならないのだろうか。それは、ヘーゲルの現代的な再解釈・再評価が進む中、ヘーゲル哲学を「開かれたもの」として解釈しようとする傾向が著しいからである。その開放的性格は、例えば、次のような論点に関連付けられる。第一に、カテゴリーの改訂可能性である。この論点は、ヘーゲル哲学を認識論や意味論として解釈する英語圏の研究でしばしば取り上げられる。カントの超越論哲学がアプリアリなカテゴリーと経験的認識を峻別し固定化したのに対して、ヘーゲルの論理学ではカテゴリーの規定が流動的で可変的であるなどと主張される。また、弁証法的運動における偶然性が強調されることも少なくない。特にポスト構造主義の論者によれば、ヘーゲルの弁証法は、後続するものから先行するものが決定される構造を伴っており、その点で未決定的な偶然性を孕んだ進化論や脳科学の捉え方に近いと指摘される。最後に、歴史相対主義との親和性が挙げられる。この論点は、ヘーゲルの歴史哲学や宗教哲学を再評価するドイツの文献学的な研究に端を発しており、近年解明が進むベルリン大学講義の開講年度による講義内容の差異に基づき、ヘーゲルの歴史観の多様性に光を当てるものである。

いずれも旧来の硬直的なヘーゲル像を翻し、その開放性を強調する点において研究上・哲学上の意義があることは間違いない。しかし、これらの解釈が前述したヘーゲル哲学の「自己閉鎖的」側面とどのように整合しうるのかは必ずしも自明ではない。なぜなら、ヘーゲル哲学の場合、いくらそこで取り上げられる諸々の概念(カテゴリー)が可変的で偶然的で多様でありうるものであるとしても、一定の体系的必然性をもって配置されることは明らかだからである。それゆえ、ヘーゲル哲学における概念やその規定が「別様でありうる」のはどの程度までか、という問いが成り立つかもしれない。言

い換えれば、例えば、新たな自然科学上の事実が発見されたとき、それはヘーゲルの自然哲学にどのような影響を及ぼしうるのか、プロイセン王国が自由主義的体制をとっていたら、ヘーゲルの法哲学はどのような構成をとりうるか、などといった仮設の疑問に答えうる一般的な条件が求められるのである。(一方で、こうした問いが極めて「非ヘーゲル的」に見える理由も究明されなければならない。)

以上の関心から本発表では、ヘーゲル哲学がその〈外部〉に開かれる条件、すなわち、哲学と現実との関係に関わる構造をメタ哲学的に解明することを試みる。

本発表の整理によれば、哲学と現実との関係に関する既存の解釈は大きく二つの立場に分かれる。第一に、基礎付け主義的解釈である(H-F. Fulda, R-P. Horstmann, R. B. Pippin, S. Houlgate)。ここでの「基礎付け」は、必ずしも厳密に「基礎」と「基礎付けられたもの」との関係を表しているわけではない。ヘーゲル哲学で扱われる概念を、認識論的・存在論的に現実を構成する基礎や基盤など見なす立場である。二つ目は、ホーリズム的解釈である(D. Henrich, R. Stern, J. McDowell)。この立場によれば、哲学は現実の延長線上にあり、両者を原理的に区別するものはない。当然ながら経験科学ではない以上、哲学を哲学足らしめる方法をどのように解するかという点は焦点となるものの、そもそも哲学から切り離された〈外部〉を想定することはナンセンスとなる。

本論の立場は、単純にどちらかの解釈を支持するものではない。というのも、どちらもヘーゲル自身が述べていることであり、それぞれその哲学の一面を捉えているとは言えるからである。ところが、これらの解釈が同時に成り立つとは考えにくいし、それどころか正面から対立するとさえ言えるだろう。それゆえ、ヘーゲルの主張に即して、これらの解釈がいかに整合するかを明らかにしなければならない。

こうした観点から、本発表では『大論理学』(1812-16年)と『エンツクロペディー』(第3版1830年)などのテキストに従ってヘーゲル哲学の成立条件を考察する。具体的には、哲学と現実、あるいは、概念と表象または思想との関係についての説明を分析し、両者の関係について、1) 哲学の現実依存性、2) 哲学の現実内在性、3) 哲学の現実構成性という三側面が認められることを指摘する。

しかし、この考察だけでは、三つの側面がどのように相互に関わるのかは明瞭ではない。そこで、時期は異なるものの、『精神現象学』(1807年)序論も取り上げなければならない。というのも、そこには哲学と現実との関係が、どちらの視点に立つかによって非対称的な関係をなすことが指摘されているからである。この指摘とともに、悟性章の「転倒した世界」論を分析することで、哲学と現実の関係に対するヘーゲルの包括的構想を提示する。

最後に改めて体系期のヘーゲル哲学に立ち戻り、その条件を検討する。そうすることで、次のことを明確にしたい。すなわち、ヘーゲルによれば、哲学の〈外部〉に現実がないわけではないとはいえ、哲学の視点に立つかぎり、その〈外部〉との関係を捉えることはできない、ということである。ヘーゲル哲学を〈開かれた体系〉と見なすのであれば、このメタ哲学的制約を考慮に入れなければならないだろう。